



Title	病いと聖化の近代：神谷美恵子をめぐって
Author(s)	井濱, 葉月
Citation	文化/批評. 2010, 2, p. 3-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

病いと聖化の近代 ―― 神谷美恵子をめぐって ――

井濱葉月

はじめに

日本の近代化は、人びとを「健常者」あるいは「病者」のいずれかに選別し、仮想された健康に向けて国民化し駆り立ててゆく過程であった。まだ病んでおらず、しかしいずれ病むかもしれない無徴の人びとは、「病者」とは一定の距離をおき、架空の「健常者」として主体化された。しかし中井久夫が指摘したように、「非病者は無徴者であるから、『非病者』という否定的表現しかできないはずであって、『健常者』ということばはおかしい」のである⁽¹⁾。

近代化の過程では、有徴の「病者」が疎外と囲い込みの対象となる。とりわけ結核、ハンセン病⁽²⁾は国民病、国辱病と名指され、近代を代表する伝染病であった。それぞれの患者は異なるかたちで疎外され、近代化のまなざしのもとに囲い込まれることとなった。なかでもハンセン病は「病者」と「健常者」がきわめて象徴的に、また物理的に隔離された病いである。

2010年現在、日本には13カ所の国立ハンセン病療養所と2カ所の私立ハンセン病療養所（神山復生病院・待労院診療所）がある。平均年齢80歳を超える入所者たちはみな無菌者であるが、社会復帰を果たした一部の人びとを除き、後遺症による障害を抱えて療養所で暮らしている。

「ハンセン病問題」というひとつの問題系が持ちだされるとき、近年の批判の多くは「ハンセン病問題は終わっていない」という修辞をもって提示されてきた⁽³⁾。それは、ハンセン病問題の解決に向けた歴史の「清算」ともとられうる動き――1996年「らい予防法の廃止に関する法律」制定、2001年「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟における原告勝訴、2005年「ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書」⁽⁴⁾の完成など――をふまえたうえで、ハンセン病患者の隔離という出来事が「風化」してしまうことへの警告である。

1996年制定「らい予防法の廃止に関する法律」には、ハンセン病回復者の権利の実現、被害の回復といった視点が含まれていなかった。このため、全国ハンセン病療養所入所者

協議会を中心に「ハンセン病問題基本法」の成立に向けた構想が練られ、2008年6月に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」として可決された⁽⁵⁾。「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」とは、療養所の将来問題に対する法律上の障害を取り除き、患者の生活の保障、社会復帰・社会生活の支援、名誉の回復・死没者の追悼、および親族に対する擁護などの諸課題に向き合い、これを解決しようとするものである。

しかしこれらの動きは総じて、隔離した・隔離された当事者たちにかかわるものであった。元患者らによる当時の国家政策・医療政策の告発・訴訟をはじめ、訴えに対する隔離加担団体の謝罪、国家の補償などの実践と、それにかかわる歴史学者たちによる調査・研究は、すでに多くの蓄積がある⁽⁶⁾。しかし「らい予防法」の廃止を経て新法が成立した今、「ハンセン病問題」を問う、問いかたそのものを考え直す必要があるだろう。隔離した・隔離された当事者間の問題に対して、直接関わらない隔離の外側に置かれた人びとは何を考えうのだろうか。

もちろん、だれもが字義通りの「無関係」ではありえない。ハンセン病患者に対する隔離が過去の出来事ではなく、時代が違えば自分もその耐えがたい状況を構成する要素となりえたことをふまえ、新たな問いかたを模索するためには、隔離政策を継続させた「当事者」たちへの擁護・批判に終わらず、また自己批判による思考停止に陥ることなく、隔離を無意識に容認した一般社会——「健常者」の住む「こちら側」——に焦点を当てる必要がある。隔離という事態がどのように合理化され、どのような力と結び付いたのかを隔離の外側から問うこと。それは、ハンセン病において展開された制度や政策が、いつかふたたび繰り返される危険に備えるための方途ではないだろうか。

1957年から1972年まで、国立療養所長島愛生園でハンセン病患者の精神医療に従事した精神科医・神谷美恵子（旧姓：前田美恵子）。鶴見俊輔は、彼女に向けた「悼詞」を「神谷美恵子は、聖者である」という一文から始めている⁽⁷⁾。また1990年代以降に神谷について書かれた数々の評伝では、生前の神谷本人の意図に反して「聖なる人」と形容されている。本稿は、ひとりの女性を聖人とみる側の論理を問うことから出発している。隔離を外側から支えた社会において、神谷のイメージはどのように形成されていったのだろうか。神谷というひとりの女性に対する評価を時代に沿って位置づけ、ハンセン病という病いと、聖化との関係を考察する。

1. 神谷をめぐる評価と批判

1-1. 評価

神谷美恵子（1914-79年）の没後30年を記念して、2009年秋に展覧会「没後30年 神

谷美恵子が「のこしたもの」(於: 思文閣美術館)が開催された。展示のイントロダクションは次のようなものである。

何故私たちでなくてあなたが?

あなたは代って下さったのだ

神谷美恵子(1914-79)が初めてハンセン病療養所長島愛生園を訪れた時に記した詩の一節である。この一言に神谷美恵子の人間性が凝縮されている。

19歳のとき、伝道師の叔父に同行し多磨全生園を訪れた。そこで、初めてハンセン病患者に接した彼女は強い衝撃を受け、自分の道はハンセン病患者に尽くすことだと思い定める。だが、その志を実現するには24年もの歳月を要したのである。父に反対され、また自らは結核を発病する。治療した後に「ハンセン病医療には携わらない」という約束をして文学から医学への転向を許され、精神科医への道を進みはじめた。終戦後には文部大臣に就任した父を助け、父の辞任後も国からの要請を受けて、GHQとの折衝に欠かせない通訳・翻訳者として引き続き従事する。その後、結婚し出産。さらに自身の癌体験を経て、ようやく長年の夢であった長島愛生園に勤務できるようになったのは43歳の春のことであった。

主著『生きがいについて』(1966)は、医師としてハンセン病患者たちと向き合う中で生まれた。体験から得た思想を文字に残したいという思いは常にあったが、生活のために語学を教えなければならない時期もあったし、妻として夫を支え、母として二児を育てながらの執筆は容易なことではなかった。出版から40数年を経た今もなお、その著書が多くの上巻を与え、読者の心を引きつけて止まないのは、神谷美恵子自身も多くの葛藤を乗り越えた一人の人間であったからではないだろうか。またその人柄ゆえ、皇后陛下のよき相談相手であったことも知られている⁽⁸⁾。

この紹介文は神谷美恵子の世間的な評価として過不足ない内容である。末文にある通り、神谷は近年「美智子皇后の心の友」「魂のカウンセラー」として知られ、人間性や業績が再評価されている。

冒頭に引用された「何故私たちでなくてあなたが? / あなたは代って下さったのだ」という詩の一節は、神谷について考えるうえできわめて重要である。1943年8月、長島愛生園に研修医として12日間滞在し、診療・手術・解剖実習を行った神谷は、研修後に「癩者に」と題する詩を綴った。

光りうしないたる眼うつろに／肢うしないたる体担われて／診察台にどざりと載せられたる癪者よ、／私はあなたの前に首を垂れる。

あなたは黙っている。／かすかに微笑んでさえている。／ああしかし、その沈黙は、微笑みは／長い戦いの後にかち得られたるものだ。

運命とすれすれに生きているあなたよ、／のがれようとて放さぬその鉄の手に／朝も昼も夜もつかまえられて、／十年、二十年と生きて来たあなたよ。

何故私たちでなくてあなたが？／あなたは代って下さったのだ、／代って人としてあらゆるものを奪われ、／地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ。

許して下さい、癪者よ。／浅く、かろく、生の海の面に浮かび漂うて、／そこはかたなく神だの靈魂だのと／きこえよき言葉あやつる私たちを。

かく心に叫びて首たれば、／あなたはただ黙っている。／そして傷ましくも歪められたる顔に、／かすかなる微笑みさえ浮かべている⁽⁹⁾。

「何故私たちでなくてあなたが？／あなたは代って下さったのだ」という一節は、神谷のヒューマニズムの象徴として頻繁に引用されている。神谷の没後にみすず書房から発刊された『神谷美恵子著作集』（全10巻・補巻・別巻）の帯コピーでは、「心の景色の美しい人／‘なぜ私ではなく、あなたが？’病める者に寄せる思いと実践のなかから紡ぎ出された言葉」と謳われた。2004年にあらたに編集された『神谷美恵子コレクション』（全5巻）の帯コピーも、「なぜ私たちでなくてあなたが？／熱く思い、黙して働くひと。『自分』を超えて生きた、切実な日々の記録。」である。

神谷の生涯、思想については1990年代以降に複数の評伝が出版されているが⁽¹⁰⁾、いずれも神谷を聖なる人としてとらえ、思想と生き方を高く評価する点で共通している。しかし一方では、「ハンセン病問題」の文脈から神谷への批判がなされてもいる。

1-2. 批判

ハンセン病問題においてはいくつかの批判の体系があり、①隔離政策推進の当事者（医学・法学・国家）への歴史的批判、②療養所内での宗教者の「慰安教化」への批判、③「感傷主義」批判、④元患者らによる訴え、の4点に大別できる。近年、神谷の再評価が進むなかで、上記4点との関わりから神谷を批判する動きが一部で高まっている。

①隔離政策推進の当事者を歴史的に批判する文脈では、神谷に向けられた批判はおもに医師としての実践にかかわるものであった。隔離政策の強権的保持者として厳しい批判を受ける光田健輔の追従者、支持者である神谷の責任が問われ、断種や隔離政策の不要性に

ついて沈黙したことに批判が及んでいる⁽¹¹⁾。

②慰安教化の文脈では、神谷の思想背景として、キリスト教の犠牲的な精神を見出す指摘がある。川村は前出の詩「癩者に」を例に、神谷の宗教性について指摘する⁽¹²⁾。癩者を〈癩という原罪〉を背負った犠牲者、殉教者として見立てたうえで、いわれのない悲しみを与えた“人類という神”に代わって「ゆるして下さい」と謝罪する神谷の身振りは、川村によれば「癩を天刑病と呼んだ古代的隠喩の再生」でしかない。

一方、ハンセン病隔離政策において宗教が果たした役割とその功罪を問う「ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書」は、神谷の思想にキリスト教の「慰安教化」と同じ構造をみる⁽¹³⁾。癩療養所内には多くの宗教関係者が出入りしていた。キリスト教布教者は、自身（ハンセン病患者）が苦しみを引き受けることで他者は苦しみから逃れられるのであるから、患者は与えられた自由のなかで現実の不合理と積極的なかわりをもつべきである、と説いた。この「慰安教化」と神谷の思想との類似をふまえたうえで、報告書は、国の過ちが人間の「天刑」にすりかえられ、強制隔離政策の作出・助長・看過への謝罪が「天刑」の犠牲者に対する謝罪にすりかえられ、犠牲者を「神の国」に委ねることで国や社会の免責が図られてしまう危険性について指摘している⁽¹⁴⁾。

③「感傷主義」批判は、長島愛生園医官小川正子による診療記録『小島の春』の流行を契機に展開された批判である。1930年代の無癩県運動の高まりのなか、小川正子は瀬戸内の島々や高知県、岡山県などの長島愛生園管轄区を回り、在宅患者の発見・収容にあたった。これをまとめた『小島の春』は「人類愛の記録」として高い評価を得、熱狂的な共感を呼んだ。皇恩を説きながら患者の収容に奔走する小川の姿は、「救癩の天使」「白衣の戦士」「救癩の聖医」として国民に受容され、熱い支持を受けることとなる⁽¹⁵⁾。『小島の春』は1940年に映画化され、戦争映画を退けて映画旬報社1940年度ベストテン第1位となり、文部大臣賞など数々の賞を受けた。

「感傷主義」は、この一連の文化現象に対して提起された言葉である。東京帝国大学教授・伝染病研究所員であった太田正雄（筆名 木下杢太郎）は、「映画『小島の春』」で次のように述べた。

癩是不治の病であらうか。それは實際今まではさうであつた。然し今までは、此病を医療によつて治療さしむべき十分の努力が盡されて居たとはいへないのである。殊に我國に於ては、殆ど其方向に考慮が費されて居なかつたと謂つて可い。そして早くも不治、不可治とあきらめてしまつて居る。従て患者の間にも、それを看護する医師の間にも、之を管理する有司の間にも感傷主義が溢れ漲つてゐるのである⁽¹⁶⁾。

太田の「感傷主義」批判は自身の医学的知見をもとに展開されていたが、光田健輔が牛耳っていた当時の日本癩学会で受け入れられるものではなかった。太田の精神は、戦後の批評家大西巨人に引き継がれていく。非－癩者が描く癩・癩者と文学とのかわりを「俗情との結託」であるとして痛烈な批判を展開する大西は、現実のハンセン病対策に如実な「半封建性・非民主制」に呼応する戦前の前期「感傷主義」のあらわれとして、『小島の春』をはじめとする通俗的な文芸作品を挙げた⁽¹⁷⁾。誤った医学知識によって遺伝病思想を温存し、あるいは強力な伝染病思想を強調し、ハンセン病患者を哀れむべき被差別者として情緒的に納得させる構図は、太田や大西が共通して批判するところである。大西以降、ハンセン病を扱った文芸批判は医官や看護婦を「救癩の使徒」「聖女」として感傷的に描き出す通俗的感情の糾弾へと向かっており、神谷は「感傷主義」批判の系譜の最後に位置づけられている⁽¹⁸⁾。

④元患者らによる批判としては、全生園自治会機関誌「多磨」に1996年8月号から2000年7月号にかけて掲載され、書籍としてまとめられた神谷論がある⁽¹⁹⁾。神谷が光田健輔に倣い、絶対隔離を否定しなかった功罪に向けられた批判であるが、神谷が身を寄せようとした「病める人びと」から提起されたものであることは重要であろう⁽²⁰⁾。

以上4点の批判は、③「感傷主義」の文脈を除き、間接的隔離執行者としての神谷に隔離を合理化する論理を読みとる試みであった。これらは、神谷の思想と実践を、隔離された被害者の立場から批判する点で共通している。しかし本稿で問題としたいのは、神谷の思想と実践を‘聖なるもの’とみる、隔離の外側の論理である。太田や大西の「感傷主義」批判の視点を引き継ぎ、神谷が隔離された島と隔離した外側の社会とを往復していたことを念頭におきながら、神谷を隔離・被隔離のどちらか一方に固定しない読み方を探ること。そこから、ハンセン病患者たちの問題を肩代わりせず、代弁することなく「ハンセン病問題」を考える糸口がみえてくるかもしれない。

まずは、神谷を世に知らしめた著書『生きがいについて』と、その発刊に続く「生きがい論」の時代を概観しておこう。

2. 生きがいの時代

2-1. 『生きがいについて』

精神科医、翻訳者として専門分野で活躍していた神谷は、主著『生きがいについて』の上梓によってはじめて世に知られたとっていい。『生きがいについて』は1966年5月にみずす書房から出版され、3ヵ月と経たずに第4刷まで版を重ねた。当時「生きがい」ということが流行し、「生きがい課」を設ける町役場が出たという⁽²¹⁾。『生きがいについ

て』は、発刊後半世紀近く経過した今でも繰り返し全集やコレクションに編み直され、書店店頭に並ぶロングセラーである。

神谷が遺した著作は数多く、精神医学の論文からエッセイ、人生哲学書、翻訳など多岐にわたるが、自身では「私が残すものは『生きがいについて』一冊でいい」と語るほど、『生きがいについて』への思い入れは深かった。長島愛生園で精神科医として働くうち、患者たちの間に充溢している「無気力感」「生きがいのなさ」を痛感し、できるだけ客観的・分析的に「生きがい」を考察したとされるが、しかし神谷自身の執着の理由は、「生きる意義」を喪った若い神谷の前に「新たな「生きる意義」として立ち現れたのがらいへの奉仕」であったことによるだろう⁽²²⁾。『生きがいについて』は、神谷自身の再生の過程を普遍化したものでもある⁽²³⁾。神谷はカール・ヤスパースのいう「限界状況」にある人々を例に挙げ、なかでも「本書の主演」としてハンセン病患者に多くの頁を割いている。神谷によれば、ハンセン病患者の持っている問題も、結局、人間がみな持っている問題をつきつめた特殊な形であらわしたものにすぎない⁽²⁴⁾。

『生きがいについて』は学位論文「癩に関する精神医学的研究」⁽²⁵⁾を書き終えた1959年ごろから本格的に構想が練られ、7年の執筆・推敲期間を経てみず書房から発刊された。現在において、神谷は生きがい論の教祖のようにみなされているが、実際は『生きがいについて』が上梓される1966年以前から、世間には「生きがい」流行の兆し、「生きがい」ということばへの注目が集まりつつあった。1964年には高橋と見田によって生きがいに関する意識調査が行われ⁽²⁶⁾、1965年には会田による婦人の生きがい調査が実施されている⁽²⁷⁾。それに続く『生きがいについて』の発刊によって、「生きがい」ということばが流行語となり、社会に浸透し根付いたと考えたほうがよさそうである。当時の「生きがい論」と神谷の『生きがいについて』の位置づけについては次項で考えるとして、ここでは『生きがいについて』とその影響をみてみよう。

『生きがいについて』によって一躍名を知られた神谷は時の人となった。各地の講演や新聞のコラム執筆、雑誌の取材などに忙殺され、『「生きがい屋」のようになってしまった」と嘆くような状況が続いた。この頃の神谷の日記には、「今日も又講演一つことわり、今月になって三つことわった」(1967.4.8)、「NHK用の原稿20枚を書きあげる」(1967.11.20)、「NHKで『病める心を見つめて』のふきこみ」(1968.1.22)、「講演つづきで自己嫌悪」(1968.1.22)といった記載が散見される⁽²⁸⁾。

神谷の生活を激変させた『生きがいについて』は、次のような問いから出発している。

「いったい私たちの毎日の生活を生きるかいあるように感じさせているものは何であろうか。ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにしてまた新しい生きがいを見いだ

すのだろうか」。神谷のいう生きがいの条件とは、「自分の生存は何かのため、またはだれかのために必要である」こと、「自分固有の生きて行く目標」に「忠実に生きている」ことである。「使命感に生きている人こそが「生きがい」感を一番強く感じられる」とし、「大きな自由を手に入れるために、現在の小さな自由を放棄し、覚悟の上で自らを不自由の中に拘束しておくというならば、そのような計画性と選択性には、やはり自由と主体性がひそんでいる」という。

難病、愛する者の死などによって生存目標を喪失した人の心の世界では、「運命への反抗から受容」「悲しみとの融和」「過去との対決」を経て価値体系と心の世界の変革が起こり、ふたたび現世へと戻る。「ひとたびこの世からはじきだされ、虚無と絶望の中で自己と対面したことのある人は、ふたたび生きがいをみいだし得た時、それがどこであろうとも自己の存在がゆるされ、受け入れられていることに対する感謝の思いがあふれている」。これが神谷のいう「生きがい」である。

「大きな自由」のために「自らを不自由の中に拘束」する「計画性と選択性」は、ハンセン病患者隔離の歴史においてあらわれた、自主的に療養所に入所してくる患者たちの増加——元患者・光岡が指摘した「Volunteer」の存在——を想起させる⁽²⁹⁾。官民一体の「患者狩り」によって強制的に連行・隔離されるのではなく、隔離側の理論を内面化し、自ら進んで隔離されるために療養所に赴く患者の姿は、「自首」のようですらある。

括弧付きの自由と主体性が時代の制約下にあるという認識が、当時の神谷になかったわけではない。仏文学者の兄・前田陽一の紹介で1963年にミシェル・フーコーと出会い、その著書『臨床医学の誕生』『精神疾患と心理学』を立て続けに訳出した神谷は、以降もフーコーの著書がフランスで出版されれば必ず入手し、その思想を追い続けた。武田は「近代を排除のシステムとみなすフーコーの考え方に触れていた神谷が、なぜ日本のハンセン病隔離政策に対して批判的な発言をしなかったのだろうか」と疑問を呈するが⁽³⁰⁾、神谷は戦後に噴出した光田健輔への批判に対し、だれもが時代的・社会的背景から来る制約からは免れえないことを理由に擁護している⁽³¹⁾。

神谷の医師としての行いや思想に対する批判は前節で述べたが、主著である『生きがいについて』に関しては、ハンセン病問題の視座からなされた批判はほとんどみられない。例外として武田は、「生きがい論の陥穽」と名付けて神谷の「生きがい」概念を批判している⁽³²⁾。武田によれば、神谷のそれは「人生に意味を与える極点を未来に置き、そこからの照射で意味を生成させる」終末論的・目的論的思考である。国土浄化、療養所のユートピア化を題目とする戦前の隔離思想にも同じ構造が潜んでいたことをふまえ、神谷が「生きがい」を国家主義的文脈から引き剥がしても成立する普遍的なものとして戦後の世

に送り出したことを指摘し、人生にただ生きる以外の目的を設定することを「生きがい論の暴力」として批判する。

武田の的確な批判をふまえ、次項では『生きがいについて』が現代にまで読み継がれてきた根拠のひとつ、普遍性をキーワードに、同時代の「生きがい論」と比較しつつ、なぜ神谷の著書が後世にまで読み継がれているのかを考えよう。

2-2. 「生きがい論」の時代

前述の通り、『生きがいについて』の発刊後 1960 年代後半から 1970 年代にかけて、「生きがい論」興隆の時代を迎えた。雑誌では数々の「生きがい」特集が組まれ⁽³³⁾、意識調査をもとに書籍が出版された。しかし「生きがい」ということが浸透しきった現代では、「生きがい」を論じた当時の書籍はほとんど読まれることなく、図書館の書庫で埃を被っている。

当時の主な「生きがい論」を概観すると、1960 年代、とくに『生きがいについて』以前には前述の高橋と見田による意識調査、会田による婦人の生きがい論などがあった。さらに見田は、著書『現代の生きがい』において、「旧い価値体系の崩壊のあとで、じっさいに日本人の心を支配した絶対的な価値とはまさしく、生活それ自体」であるとし、「生存の問題から解放されたときにはじめて、人はみずからの生存をふりかえてその意味を問う」と指摘した⁽³⁴⁾。また宮城は『日本人の生きがい』のなかで、「今日ほど生きがいが問題になったことはなく、生きがい論が多面で論議的になった時代はない」とし、その理由として①人びとの生活水準の上昇によって生きるための努力がいなくなったこと、②既成の生きがい崩壊し新しい生きがい求められるとともに、個人が自らそれを見出す時代になったことを挙げている⁽³⁵⁾。

「生きがい」が注目された時代背景として、神谷も「戦争直後は食べるためだけに狂奔しなければならぬ時代であったから、だれも生きがいについて自分に問いかけるゆとりもなかった」としたうえで、「高度経済成長により、ものを考えるゆとりのあるひとがふえて、はじめて倦怠や虚無感に悩まされる人が多くなってきた」と述べている⁽³⁶⁾。これは見田や宮城をはじめ、同時代の論者による「生きがい論」とほぼ同じ視点といえる。では、今も神谷美恵子コレクションとして書店店頭に並ぶ神谷の『生きがいについて』と、読まれなくなったその他の「生きがい論」との違いは何だったのだろうか。

前述の通り、『生きがいについて』では生きがい喪失の例を「限界状況」の人たちに求めていた。がんや原爆症の人、最愛の者を失った人、死刑囚、戦没学生、精神病患者、そして「本書の主役」であるハンセン病患者を例に、精神医学、心理学、文学、哲学、伝記

等の文献を駆使して思索された神谷の生きがい概念は、武田も指摘するとおり時代を超えた普遍性を備えたものである。他の「生きがい論」は対象を主婦や労働者をはじめとする、当時の現代人に設定していた。『生きがいについて』が名著として読み継がれる理由はおそらく、神谷の「生きがい」がどのような時代においても適応できることにある。「限界状況」はどのような時代、どのような地域にも起こりうる。だからこそ、『生きがいについて』で例示されるハンセン病患者の心理状態、ひいてはかれらに対する待遇と隔離の根拠が普遍化されてしまう危惧について、神谷が無自覚であったことに注意を払わねばならない。

神谷がもつ普遍性は、神谷を‘聖なる人’とみる大衆の心性とも連動している。神谷を聖人とみなし、感傷的にとらえるまなざしはどのような背景のもとに成立したのか。またその媒介となったものは何だったのか。神谷を受容し、隔離を外側から支えた側の展開を追ってみよう。

3. 聖化するまなざし

神谷に対する聖化は、生前と没後でその性質を異にしている。ここでは、まず「生きがい論」興隆の時代に注目された「救癩の使徒」としての神谷のイメージを追い、次いで没後、とくに1990年代以降に浴びた注目とそのまなざしのありかたについて、雑誌や書籍などの大衆メディアを中心に考察する。

3-1. 救癩の使徒として

『生きがいについて』が発刊されると、まず神谷の異色の経歴に注目が集まった。とくに人びとの関心を引いたのは、隔離された癩療養所・長島愛生園での献身である。すでにみたように、少なくとも1970年代当時の「生きがい論」は、神谷の提示した「生きがい」とは異なる意味をもつことばとして消費されていった。それは、当時の人びとが神谷を「生きがい論」の論客としてではなく、ハンセン病患者に奉仕する女性として、『小島の春』の小川正子の類型としてとらえたことによるだろう。1966年の『朝日ジャーナル』に掲載されたグラビアはその代表的なものである⁽³⁷⁾。連載「紹介します」第1回、見開き2ページにわたるグラビアには、ベッドに横たわるハンセン病患者に身をよせ、耳を傾ける神谷の上半身が大きく映しだされている【図版1】。キャプションは「長島愛生園精神科医長」というより求道の童女の呼称がふさわしい。白い帽子、消毒衣の神谷の手は病み崩れて指のない患者の手首を握っている。神谷の背後には無人のベッドが映りこんでおり、神谷に手を握られた患者の顔や身体は仰角のアングルのためほぼ写っていない。わず



【参照図】別アングルの写真

(朝日新聞社所蔵)

【図版1】「紹介します」グラビア

かにみえるのは萎えた手と左耳、そして左頬のみである。読者に伝わるのは「癪者」越しの神谷の表情であって、ハンセン病を病み精神を病んだだけか、あるいは神谷の背後のベッドに横たわっているはずのだけかではない。もちろん、「遺伝病」という迷信ゆえに、多くのハンセン病患者が郷里の親族と縁を切られた時代背景を考えれば、患者を特定できる「個性」が隠されたことは想像に難くない。しかしこの写真のなかの象徴的な患者の姿、「癪者」としかみえないように切り取られた患者の姿は、「ただ自分らしい表情を、自分以外には誰も持つてゐない私の表情を失ふのが堪らないのだ」と書いたハンセン病作家・北條民雄の苦悩を想起させる⁽³⁸⁾。この写真は「田中出版写真部員」によって撮影され、同じロケーションで撮られたものがほかにも確認できる【参照図】。

グラビアの次ページに続く紹介記事には、「一つの完全」というタイトルが三段抜きで大きくレイアウトされている。神谷の容貌は「ある種的美智子妃像に年輪をあたえ、肩をはぐした感じ」、癪者の手を握るさまは「美と醜のふしぎな交流」と形容されている。続いて神谷の父・前田多門と神谷自身の経歴、夫の神谷宣郎の経歴がそれぞれ列記され、近著『生きがいについて』が紹介される。『生きがいについて』は「ライ患者などの精神状況を素材に、膨大な学術書、思想書を駆使してまとめた一編。すぐれた教養書」と評価され、神谷は「停止、ためらい、沈潜をくりかえす俗人とは無縁」、「教養的・開明的に昇華した、まれにみる美しい童女」と表現される。その論調は神谷を全面的に賞讃するものではなく、むしろ世俗離れた聖人として一般の人々と距離を置く。掲載時の神谷は51歳であったが、容貌・内面ともにあどけない「童女」とくりかえし強調されていた。

丸山は小川正子を例に挙げ、「癪」にかかわる女性への聖化を「宗教性なき、「きよらかさ」へと押し上げる力」と指摘した⁽³⁹⁾。人びとは聖化によって彼女たちを自分とは違う

存在として切り離し、空間的・精神的に遠ざけたうえで「理想的な人間」として見出すという。類似の力は戦後の神谷に対しても働いている。

一方の患者は「ライを病んだうえに心もおかされた、極限状況の人」と描写されている。「ホテルのcockだったという男の顔には隆起がない。生气、もちろんない。残ったわずかの表情をその目に集中させて、この人（注：神谷）に甘える」と続く。診察の場を「美と醜」「劣に対する優の引け目」と表現するこの記事は、聖と俗、美と醜、優と劣といった2元的な価値観に神谷と患者を封じ込めようとする。ここでの神谷と患者の関係は、一方的に慈悲を与える者と与えられる者でしかない⁽⁴⁰⁾。

評伝『神谷美恵子』（Century Books一人と思想）を記した江尻は、この1枚のグラビアを次のように記憶している。「もう何年も前に、『朝日ジャーナル』で毎号一人ずつ特徴ある仕事をしている人を取りあげ、グラビアで紹介していたことがあると記憶しているが、その最初の頃に長島愛生園で病室を巡回し患者さんと会っていらっしゃる先生が紹介され、慈母観音という言葉があったように思う」⁽⁴¹⁾。江尻が何年も前に目にしたというグラビアは『朝日ジャーナル』のもので間違いなйдらう。しかし「慈母観音」という表現はこの記事には見当たらない。江尻はグラビアの構図と神谷の表情から「慈母観音」を連想し、記憶したのではないだろうか。江尻に限らず、当時の人びとの意識には、戦前の貞明皇后による救癩事業の皇恩が、ひいては千人施浴で知られる古代の光明皇后の説話があったかもしれない⁽⁴²⁾。仏教に篤く帰依した光明皇后は悲願のため法華寺で千人の垢を洗い落とすが、千人目にあらわれたのは「癩者」であった。「穢れ」とされる「癩者」にためらいながらも湯をかけ、皇后が膿を吸い出すと、「癩者」は金色の光を放ち阿闍如来に変じたという。グラビアとして切り取られた神谷の診療場面は、光明皇后の施浴説話に類似した構図をもつ。施浴説話は『元亨釈書』をはじめ多くの書物に残されており、「穢れ」に直接接触することで「癩者」が「聖」へと反転する、宗教的な本来の意味での「聖化」の契機が示されている⁽⁴³⁾。しかし江尻の記憶では、「慈母観音」とされたのは神谷であった。

皇室と救癩事業をめぐる、文芸の果たした政治的機能と昭和期の貞明皇后の神格化について論じた荒井は、古代の光明皇后と、昭和戦前・戦中期の貞明皇后との相違について重要な指摘をしている⁽⁴⁴⁾。施浴説話において光明皇后は単なる聖人ではなく、身の内に聖／穢を混在させた両義的かつ境界的な存在であり、一方の癩者も仏へと反転しうる聖性を内包していた。しかし昭和期の貞明皇后とハンセン病患者の関係では聖／穢は完全に一義化され、二者関係は反転することがない。荒井の指摘に倣えば、このグラビア記事ではさしあたり神谷も一義的な聖性のみを担っているといえるだろう。また、ハンセン病と精神病という境界的疾患を二重に抱えているにもかかわらず、患者は両義的・境界的な存在

とはみなされない。もちろん「聖化」の回路も失われている。隔離政策は身近な空間からハンセン病患者を排除したが、一般社会に生きる人びとは感染の恐怖から逃れるかわりに、生きたハンセン病患者の実感を得られなくなっていく。

これをふまえたうえで、長島愛生園で撮影されたもうひとつの雑誌グラビアをみてみよう【図版2】。これは1970年の『婦人友』に掲載された「今月の顔」のコーナーグラビアである⁽⁴⁵⁾。神谷と精神病棟の看護師たちが長島の楯岩海岸にたたずみ、どこかを眺めて楽しげに微笑している。キャプションには神谷が書いたコラム「島での同労者たち」が記載されており、島の精神医療の歩みと同労者たちの熱意・努力がたたえられている。

掲載時の写真から伝わるのは岩場にたたずむ看護師たちの姿のみであるが、同じロケーションで複数の写真が撮影されており、後年の著作集などに残されている【図版3】。楽しげに笑う看護師たちの視線の先、波打ち際にいたのは島の患者たちであった。撮影当時の状況については、神谷自身の日記の記述からも窺い知ることができる。「島へ。岡山で婦人友のカメラマン柿崎氏と一緒に、島で五病棟の看護婦さんたちと崖下の海辺で写真をとられる。古藪、連ちゃん、永原さん、安仁屋君ともにきたる。岩と海に光る斜の陽ざし。患者たちの小児のような姿。看護婦たちの明るいやさしい微笑。天国のごとし」(1969.11.9)⁽⁴⁶⁾。日記内に出てくる呼び名は愛生園の精神病棟の患者たちのものである。

講演や原稿執筆に追われ、学生運動に参加した長男の律から「思想的弱さ」を糾弾されるなど、実生活で問題を抱えていた当時の神谷にとって、島での時間は安らぎであった。



【図版2】 婦人友「今月の顔」グラビア

(柿崎平四郎氏撮影)



【図版3】 著作集別巻「人と仕事」より

しかし患者を小児のように無垢で無抵抗なものとみなし、隔離された島を天国とすることに疑問をもたない神谷のありようは、療養所を「別天地」「樂園」とする戦前のユートピア思想と連続している。

そしてここでもまた、患者の遠景化が進んでいることが指摘できるだろう。もちろん「島での同労者たち」のグラビアであるから、神谷と看護師たちだけが映っていても不思議ではないが、しかしこのとき患者たちが掲載されなかった意味を問うことは無駄ではない。先にふれたように、神谷が生きた時代にはすでに世間から生身のハンセン病患者の姿は消え、人びとは患者を目にすることも、ましてや触れることもなく、漠然とした「癩者」のイメージのみが先行していくのである。

これらのグラビアと記事は、神谷のイメージをあるひとつの方向に導いたことだろう。隔離された島で哀れな「癩者」を見守る聖女——それは戦前の小川正子に対する聖化のまなざしと同じである。『朝日ジャーナル』や『婦人之友』をはじめとする大衆雑誌の読者であった人びとの反応は、神谷が「かなりの人がこちらを『救らいの使徒』でもあるかのように錯覚し、住みこんでもいない長島愛生苑に今なお手紙が舞い込んだりする」⁽⁴⁷⁾と戸惑うような状況を招くものであった。島に手紙を送った人びとの背後には、神谷の生き方に感銘を受けたさらに多くの人びとが想定されるが、かれらは自身も隔離を肯定し支えていることに無自覚である。それは1930年代の「感傷主義」の構図にはかならないが、しかし戦前の小川が「皇恩」を掲げ、貞明皇后の御仁慈の伝達者・代理執行人として「救癩」活動を行ったのに対し、神谷は戦前の皇室のプロパガンダであった「救癩」とは無縁な位置にいた。にもかかわらず、当時の人びとは神谷を美智子妃になぞらえ、皇后による「救癩」を読みこんだのである。次に、神谷とハンセン病患者、皇室とのかかわりについて、1990年代に時代を移して追ってみよう。

3-2. 皇后の相談相手として

1990年代以降、神谷の再評価が近年進んでいることは先に述べた。それは「ハンセン病問題」とは異なる文脈で展開されており、1960～1970年代の「救癩の使徒」としての聖化ともまた異なっている。『生きがいについて』は読まれ続けていたものの、「生きがい論」の時代の後、1990年代以前には知る人ぞ知る存在⁽⁴⁸⁾であった神谷が、あらためて「美智子妃の心の友」「魂のカウンセラー」としてメディアに取り上げられ、再発見された経緯について考えてみたい。

1990年代の「神谷美恵子著作集」の帯キャッチコピーを年代順に追ってみよう。「神谷美恵子著作集」は1980年から3年にわたって発行され、2004年に「神谷美恵子コレク

ション」が発刊されるまで版を重ねている。全著作集共通のキャッチコピー「なぜ私ではなくあなたが？」は、1990年以降「川嶋紀子さんの愛読書！「結婚を決意させた運命の一冊」として、テレビや週刊誌で紹介された、いま、話題の本。」（著作集3『こころの旅』）に変更されている。また『生きがいについて』（著作集1）は、「紀子さま青春時代の愛読書Ⅱ美智子さまから紀子さまへ渡された神谷美恵子の代表作」となっている。厳密な時期の特定は難しいが⁽⁴⁹⁾、少なくとも1998年の奥付分までは皇室とのかかわりを強調したキャッチコピーが使用された。また1996年以降には、「日本テレビ 知ってるつもり?! 放映 心の景色の美しい人」が新たに加わっている。

1990年代になって続々と出版された神谷の評伝においても、「美智子さまの心の主治医の魂にひびく清らかな生き方」（「神谷美恵子 聖なる声」）、「なぜ、紀子さまが神谷美恵子に感動されたのでしょうか」（「神谷美恵子の生きがいの育て方」）など、民間から皇室へ嫁いだ女性とのかかわりが強調されている。

1990年代に神谷の著作や評伝が増刷され、書店の店頭に平積みで並べられ、テレビや雑誌等のメディアで取り上げられた背景には、秋篠宮文仁親王の結婚があった。1990年の婚約発表の際、川嶋紀子（文仁親王妃）が『こころの旅』を愛読書に挙げたことで、神谷美恵子の名は一躍脚光を浴びたのだった。そしてもうひとつの背景として、神谷と美智子妃との関係が取り沙汰されるようになったことが挙げられる。神谷の日記や書簡集では伏せ字にされ、皇室内でも長年秘められていた美智子妃と神谷との関係が明るみに出たのは1990年代半ば、皇室報道が過熱していた時期と推測できる。1989年の昭和天皇崩御、1990年6月の秋篠宮結婚、11月の平成天皇即位などが重なり、1980年代末から1990年代にかけて、マスコミでは競って皇室関係の出来事が報道されていた⁽⁵⁰⁾。

神谷と美智子妃との関係については宮原によるルポ『神谷美恵子 聖なる声』があり⁽⁵¹⁾、その内容は夫の神谷宣郎や皇室関係者の証言によって裏付けられている。神谷は1965年から1972年にかけて、美智子皇太子妃の相談役、話し相手として東宮御所に通っていた。この時期の美智子妃は宮中聖書事件に関する報道、胎状奇胎による男児流産などで精神的窮地にあり、神谷の兄・前田陽一が当時の皇太子にフランス語を教えていた縁で、神谷が相談相手に選ばれた。しかし精神科医が皇太子妃のもとへ通うことは誤解を招くとして、一連の会見は長年伏せられてきたという。神谷が東宮御所に通っていた時期は、精神科医として長島愛生園に通った時期とも重なっている。

1990年代当時の雑誌記事から、代表的なものをみてみよう。「美智子皇后「最悪の日々」を癒した著名な精神科女医」と題する記事⁽⁵²⁾は前述の宮原の著書を下敷きに書かれたもので、失声症とも噂された時期の美智子妃と神谷の交流を軸に、伏せられていた過

去を関係者に問うかたちで構成されている。神谷の存在を「美智子妃にとって姉のような人」「魂のカウンセラー」としたうえで、夫である神谷宣郎になつかしく接し、故人となった神谷を偲ぶ現在の美智子皇后の姿が描かれる。最後に宣郎の談話を載せ、「当時の長島愛生園のハンセン病患者と美智子妃は、ともに極限の孤独の中にある、という共通点があった」と締めくくられるが、これは宮原の視点と重複している。宮原も両者を「極限の人」といい、神谷を「極限の人の心の支え」と表現している。かさねて、「長島愛生園の患者のように、病んでいる孤独な人たちは、ここで一種の友だちに似た感情を持つようになる。(美智子妃の：引用者)「沈黙の美しさ」が、人びとの心の慰め、励みになっていく」ともいう⁽⁵³⁾。宮原はハンセン病患者と皇后とともに「極限の人」とみなし、神谷をかれらの補助者、媒介者として配置している。

ほかの雑誌記事では、たとえば連載「証言で綴る宮中改革の40年 美智子さまと封印された聖書 第4回」⁽⁵⁴⁾がある。「3度目の妊娠中に会った精神科医・神谷美恵子さんとの『こころの旅』——。“暗い森の中”の美智子さまを救った魂の詩！」とのサブタイトルが付されており、宮中での美智子妃いじめから神谷との出会い、7年半にわたる心の絆へと話が展開される。「癪者」については、神谷が「ハンセン病患者の心の闇に灯をともしつづけていた」こと、美智子妃が聖心時代にボランティアとしてハンセン病患者と文通していたことを指摘するにとどまっている。神谷が紀子妃の愛読書『こころの旅』の著者として注目を浴びた1990年前後には、主にハンセン病医療に従事した女性精神科医という側面が取り上げられていた⁽⁵⁵⁾。1996年以降に美智子妃との秘話が流布されることで、ハンセン病患者と神谷のかかわりは後退し、具体的には描写されなくなっていく。

皇室の女性と「癪者」の関係については次で考察することとし、他メディアでの神谷の取り上げられ方をみておこう。1990年代半ばに放映された2つのドキュメンタリー番組は世間的に大きな反響を呼んだ。1996年の「ハンセン病に捧げた命」(知ってるつもり?! 1996.5.26)、1997年の「極限の生と死を見つめて・強制隔離の孤島でハンセン病患者を支え続けた精神科女医の壮絶な記録」(驚きももの木 20世紀スペシャル 1997.9.26)である。いずれの番組も20%前後を叩き出す高視聴率番組であったため、神谷の名とその人生はさらに広く知られるようになった。先に少しふれた通り、著作集の帯に番組名が冠され、『生きがいについて』をはじめとする著作はさらなる読者層を獲得する。この流れを受けて、2004年から新たに『神谷美恵子コレクション』全5巻、豊富な写真と文字でその人生を追った『神谷美恵子の世界』が刊行されている⁽⁵⁶⁾。

神谷が再び見出された1990年代は、「らい予防法の廃止に関する法律」の制定に向けて世論が動いた時期であり、強制隔離政策とその施策者、医師などへの批判が社会に横溢し

た時期にあたっている。「ハンセン病問題」への社会的関心とも相俟って、神谷が再発見され、再評価された側面もあっただろう。神谷を「救癩の使徒」とみる感受性が依然存在したことは確かだが、1990年代においてはむしろ、神谷と「癩者」とのかかわりよりも、神谷と皇室との接近が問題となる。最後に、皇室と「癩者」との歴史的なかかわりについて触れておこう。

3-3. 皇室とハンセン病

先に触れたように、皇室とハンセン病医療とのかかわりは奈良時代の光明皇后の施浴説話まで遡る。この伝承を再顕するかたちで近代に展開されたのが、「皇恩」の名のもとに「救癩」をうたう大正天皇妃・貞明皇后主導の隔離政策である。救癩事業は「皇室を慈善恩賞の府、とりわけ慈善の府となし、皇恩の広大さを目にみえるかたちで国民に知らしめるもっとも有効な事業」⁽⁵⁷⁾であった。1930年、貞明皇后は癩予防協会の設立準備に際し、基金として「御手許金」248,000円を下賜している。また1932年の大宮御所の歌会では、「癩患者を慰めて」と題し「つれづれの友となりても慰めよ 行くことかたきわれにかはりて」と詠んだ。この御歌は皇室の救癩事業の要となり、貞明皇后によって示された慈悲のもと、隔離政策は「社会事業界の寵児」として社会的関心を集めるようになる⁽⁵⁸⁾。強制隔離・迫害と、同情・慈愛が表裏一体となる癩病対策を迫害強化という暴力を隠蔽する慈母たる皇后の関係と同型とみる、藤野らの指摘は重要である⁽⁵⁹⁾。小川正子はこの救癩事業の最盛期に活動した人物であり、貞明皇后のかわりに「つれづれの友」として隔離政策を遂行したといえる。貞明皇后による救癩事業は戦後も継続され、1951年に没した後は息子である高松宮宣仁に継承された。癩予防協会は翌1952年に財団法人藤楓協会と名称を変え、初代総裁には高松宮が就任する。この一連の動きには、厳父である男性皇族が軍務に就き、慈母である女性皇族が軍事救護や福祉に携わるという、戦前の皇室における役割分担⁽⁶⁰⁾からの転換がみられる。ここで国民の慈母たる皇后とハンセン病との結びつきは一旦絶えることとなった。

神谷が「救癩の使徒」の文脈において名を知られた1960年代は、高松宮総裁による救癩事業の時代にあたっている。神谷はすでに皇恩の伝達者・代理執行人ではなかった。学識や行動、人格、容貌によって「聖」に類するものとみなされた神谷は、俗人・一般人とはかけはなれた存在として表象される。聖化された神谷は、「癩者」に慈悲を垂れる存在として、「行くことかたき」人びとの後ろめたさを回収していた。人びとは神谷を媒介として「癩者」の姿を垣間見、「生きがい」喪失という共通のワードを手掛かりにかれらの苦悩を読みこんだ。そして疾病からくる苦しみと、文化的病いとして受ける苦悩を混同し

たまま、生身のハンセン病患者の存在を自らの生活圏から消していくのである。

没後の神谷は世間的な意味での有名人ではなくなるが、これは「生きがい論」ブームの鎮静化とも関連するだろう⁽⁶¹⁾。再び注目を浴びた1990年代には、明仁天皇と美智子皇后が国立療養所多磨全生園を慰問するという大きな契機があった。皇太子妃時代、1975年にも国立療養所沖繩愛楽園を慰問しているが、即位後ではこれが初となる。元患者らの前に膝を折り、手袋を外して元患者らの手を握り、涙を浮かべ一人一人にことばをかける皇后の姿は人びとに強い印象を残した⁽⁶²⁾。天皇皇后によるハンセン病療養所慰問は以降も継続され、2010年時点で13カ所の国立療養所を訪れている。これは皇后によるハンセン病事業の再開とともれる動きだが、しかし貞明皇后のように強大な「御仁慈」が振りかざされるわけではない。美智子皇后は「極限の人」たちと同じ低さに身を屈め、語りかけたのである。

皇室の女性とハンセン病の関係からみると、神谷の存在は媒介的なものとなる。『生きがいについて』の時代の神谷は「癪者」のことば、苦悩を一般社会に伝達する役割を果たしていたが、1990年代になって再発見された美智子皇后とのかかわりのなかで、人びとは神谷を媒介に美智子妃のことば、苦悩を読みこもうとした。皇后と「癪者」はいずれも一般社会の人びとから隔絶されており、本来ならばその姿を見、声を聞くことは難しい。しかし神谷の存在に通じて、人びとは聞くことができない声を聞き、その姿を垣間見るのである。

一方で「極限の人」と位置づけられた美智子皇后は、神谷にはない両義性を獲得したともいえる。片野は近代の皇后である昭憲皇太后、貞明皇后、香淳皇后、美智子妃について、「美しく、やさしく、しかも「お気の毒」であればこそ、皇后は、私たち国民の心を魅了しつづける」と指摘した⁽⁶³⁾。人びとの同情は慰める側・慰められる側の両方に寄せられ、「感傷主義」の新たな局面が立ちあらわれてくる。

おわりに

皇后が語りかける「極限の人」たちは、イメージとしての「癪者」ではなく、ありのままのハンセン病元患者なのだろうか。

今もなお、神谷に対する聖化は終わってはいない。それは「ハンセン病問題は終わっていない」という提言と表裏である。戦前の小川正子とは異なり、神谷に対する評価は美智子皇后の言動と評価に連関しながら展開するのである。

2010年5月24日、天皇皇后は静岡県御殿場にある国立駿河療養所、ならびに日本最古のハンセン病療養所・神山復生病院を慰問した。この動きと関連してか、ハンセン病元患

者と美智子皇后について、そして神谷についての記事が雑誌の誌面を飾っている。「岡山・長島 神谷美恵子さんとの交感にみちびかれ 美智子皇后は何に祈り涙されるのか」⁽⁶⁴⁾、そして「祈りの42年 皇后美智子さま ハンセン病元患者が涙した慈愛の手—全国に15ある療養所を訪ね続けられる思い—」⁽⁶⁵⁾である。2010年に書かれたこれらの記事に、神谷についての新事実や視点の転換はない。神谷に対する批判には触れないまま、20年前に人びとの感傷を喚起した物語が再生されるだけである。

すでに元患者たちは無菌状態にあり、社会復帰した者もある。国は隔離政策の誤りを認めて謝罪し、悪法は廃止された。元患者たちはすでに法的な隔離状態にはない。にもかかわらずかれらが療養所に残り続けていることは、当事者以外の、隔離の外側の人びとにもかかわる問題のはずである。しかし「祈り」や「涙」、「慈悲の手」は、この問題を考えようとする人びとの思考を停止してしまう。「感傷主義」批判はここにおいても有効でありつづけている。

注

- (1) 中井久夫『治療文化論』岩波書店、1990年、119頁。
- (2) 本稿では病いの歴史的意味づけが背景にあるため、「癩」「癩病」「癩者」も歴史的文脈にしたがって用いている。資料、固有名詞の引用については原本に倣う。
- (3) 南日本放送ハンセン病取材班 編『ハンセン病問題は終わっていない』岩波書店、2002年をはじめ、元患者らによる提言など。
- (4) 財団法人日弁連法務研究財団『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』2005年 (http://www.jlfor.jp/work/hansen_report.shtml)
- (5) ハンセン病問題の解決の促進に関する法律（平成二十年六月十八日法律第八十二号） (<http://law.e-gov.go.jp/announce/H20HO082.html>)
- (6) 前掲『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』。ならびに藤野豊『日本ファシズムと医療 ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店、1993年、『「いのち」の近代史「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版、2001年、『ハンセン病と戦後民主主義 なぜ隔離は強化されたのか』岩波書店、2006年、『ハンセン病反省なき国家『「いのち」の近代史』以後』かもがわ出版、2008年。成田稔『日本の癩対策から何を学ぶか』明石書店、2009年等を参照されたい。
- (7) 鶴見俊輔「神谷美恵子管見」みすず書房編集部『神谷美恵子の世界』みすず書房、2004年、86頁。
- (8) 「没後30年 神谷美恵子がのこしたもの」（於：思文閣美術館 2009年10月3日～12月20日）フライヤーより転載。
- (9) みすず書房編集部、前掲、90-91頁。書かれたのは1943年夏、『人間をみつめて』には「らいの人に」のタイトルで収められている。
- (10) おもな評伝については以下の通り。

- ・江尻美穂子『神谷美恵子 Century Books—人と思想』清水書院、1995 年
 - ・宮原安春『神谷美恵子 聖なる声』講談社、1997 年／文春文庫、2001 年
 - ・神谷美恵子東京研究会『神谷美恵子の生きがいの育て方』文化創作出版、1997 年／新版 PHP 文庫、2006 年
 - ・柿木ヒデ『神谷美恵子 人として美しく』大和書房、1998 年
 - ・太田雄三『喪失からの出発 神谷美恵子のこと』岩波書店、2001 年
 - ・太田愛人『神谷美恵子 若きころの旅』河出書房新社 2003 年
- (11) 神谷の歴史的批判については、沖浦和光・徳永進編『ハンセン病 排除・差別・隔離の歴史』岩波書店、2001 年あるいは武田徹『「隔離」という病い 近代日本の医療空間』中央文庫、2005 年、内田博文『ハンセン病検証会議の記録－検証文化の定着を求めて；世界人権問題叢書 62』明石書店、2006 年等を参照。
- (12) 川村湊「ライ、古代的隠喩」『現代思想』1992 年、20(6)、204-212 頁。
- (13) 前掲『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』。
- (14) 前掲、内田博文、308 頁。
- (15) 『小島の春』現象については、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』岩波書店、1996 年、第3章（79-133 頁）を参照されたい。
- (16) 太田正雄「映画『小島の春』」『日本医事新報』1940 年、935 号、57-58 頁。
- (17) 大西巨人「『ハンセン病問題 その歴史と現実、その文学との関係』」『大西巨人文芸論叢（上巻）俗情との結託』立風書房、1982 年、312 頁。感傷主義の文芸作品については、拙論「伝染と遺伝の近代—「不治」の時代の結核とハンセン病療養施設から—」『家族写真の歴史民俗学的研究』科学研究費補助金・中間報告書 近代日本における表象と語り』2008 年、229-276 頁を参照されたい。
- (18) 前掲、荒井英子。ほか、丸山泰明「『癪』とヒロイン—近代におけるイメージの創出をめぐる—」『日本学報』2000 年、19 号、143-164 頁、あるいは前掲、武田徹、2005 年など。
- (19) 鈴木楨一『ハンセン病—人間回復へのたたかい—神谷美恵子氏の認識について』岩波出版サービスセンター、2003 年。
- (20) 『生きがいについて』『人間をみつめて』には、与えられた境遇に従順でない患者、團の組織や方針を批判し、患者の人権のために闘争するような患者を神谷が肯定的にとらえていない記述が散見される。
- (21) 前掲、江尻美穂子、165 頁。前掲、柿木ヒデ、85 頁。
- (22) 前掲、みすず書房編集部、90 頁。
- (23) 神谷は少女時代に野村胡堂の長男である野村一彦ときわめてプラトニックな恋愛関係にあったが、野村一彦は 21 歳で腎臓結核で死亡、神谷は「世界が崩れ落ちるようなショック」を受けた。神谷はこのときの体験をハンセン病を宣告されたハンセン病患者たちの「生きがいの喪失」に類するものと位置付け、自身を「極限の人」の側に置こうとする。美恵子と一彦の関係については前掲書『神谷美恵子 聖なる声』、野村一彦「会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと。神谷美恵子との日々」住川碧編、港の人／新宿書房、2002 年、前掲書『喪失からの出発 神谷美恵子のこと』に詳しい。

- (24) 以下、『生きがいについて』の引用・要約は神谷美恵子著作集1『生きがいについて』みすず書房、1980年をもとに行った。
- (25) 神谷美恵子著作集7「癩に関する精神医学的研究」『精神医学研究1』みすず書房、1981年、29-71頁。
- (26) 高橋徹、見田宗介「日本人の理想の人間像」『中央公論』1964年、8月号、146-160頁。
- (27) 会田雄次「現代に生甲斐はあるか」『婦人公論』1965年、3月特大号、68-74頁。
- (28) 神谷美恵子著作集10『日記・書簡集』みすず書房、1982年、171-178頁。
- (29) 光岡は、「昭和八、九年という時期は、やはり一つの変わり目であった。府県の患者調査リストによって、警察や役場から勧奨され、「狩り立て」られて送致されてくる収容者だけでなく、自分から入院を求めて入ってくる Volunteers が現れて来たということ、そこに端的に新しい時代の徴候があった」と述べている（光岡良二『いのちの火影―北条民雄覚え書き』新潮社、1970年、34頁）
- (30) 前掲、武田徹、145頁。
- (31) 「戦後、サルフォン剤でらいが治るようになってみると、患者さんを強制的に隔離収容するという政策がにわかに非人道的なものに見えてきた。（中略）非難が烈しいかたちをとって園で爆発したこともある。歴史とは苛酷な面を持つものなのだ」「いったい、人間のだが、時代的・社会的背景から来る制約を免れ得るであろうか。何をするにあたって、それは初めから覚悟しておくべきなのであろう。私はむしろ、歴史的制約の中で、あれだけの仕事をされ、あれだけのすぐれた弟子達を育てた光田先生という巨大な存在に驚く」（著作集2『人間を見つめて』より「光田健輔の横顔」、183-184頁）
- (32) 前掲、武田徹、135-190頁。
- (33) 1960～1970年代に「生きがい」を特集したおもな雑誌は、1968年『思想の科学』『私たちはいま何を生きがいとしているのか?』、1969年『労働福祉』『生きがいを拓く福祉労働』、1970年『朝日ジャーナル』『からめとられる現代の生きがい』、同年『現代教育科学』『「生きがい」を教えることは可能か』、1971年『潮』『生きがいと宗教』、同年『別冊中央公論』『生きがいの設計―キャリア・ビルドのすすめ』、同年『月刊福祉』『「老後の生きがい」をめぐって』、1974年『世紀』『生きがいと幸福』、同年『労務研究』『仕事・余暇・生きがい』、1976年『教育』『教師の生きがいと自己変革』、1977年『月刊福祉』『「生きがいと世相』、同年『比較思想研究』『「生きがいについて』、1979年『月間福祉』『「障害者の就労と生きがい』、1981年『児童心理』『「子どもの生きがい』ほか多数。
- (34) 見田宗介『現代の生きがい』日本経済新聞社、1970年、21-23頁。
- (35) 宮城音弥『日本人の生きがい』朝日新聞社、1971年、1頁。
- (36) 前掲、著作集1、273頁。
- (37) 「紹介します 第1回」『朝日ジャーナル』1966年、8（4）、123-125頁。
- (38) 北條民雄『定本 北條民雄全集 下』東京創元社、1996年、103頁。
- (39) 前掲、丸山泰明、161頁。
- (40) 神谷の「島日記から」によれば、この患者は「オリエンタル・ホテルでコックをしていた」S・Sと推測できる（著作集2『人間を見つめて』、208頁ほか）。S・Sは教祖的性格、難解な言葉と神谷に教えを説き、英語の料理名などをまじえて抽象論を独語する患者で

あった。神谷との間に信頼関係はあったが、常に敬語で接し、記事のような「甘える」といった人格ではない。また彼は1969年当時すでに盲目であったため、「残ったわずかの表情をその目に集中させ」ることはおそらく難しい。

- (41) 前掲、江尻美穂子、117 頁。
- (42) 文部省国民学校国語教科書『初等科国語 三』では、「六、光明皇后」に施浴説話が掲載されている。
- (43) 阿部泰郎『湯屋の皇后』名古屋大学出版会、1998 年、18-24 頁、黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』東京大学出版会、1986 年。
- (44) 荒井裕樹「御歌とく救嶺―貞明皇后神格化と御歌の社会機能をめぐって」『文学』2006 年、7 (6)、190-203 頁。
- (45) 「今月の顔」『婦人友』1970 年、1 月号グラビア。
- (46) 前掲、著作集 10、182 頁。
- (47) 前掲、著作集 10、244 頁。
- (48) 前掲「神谷美恵子の生きがいの育て方」文庫版前書きには、「生前、美恵子は相当の著書を残した。当時から一部に熱心な愛読者がいたが、世間的な意味での有名人ではなかった」と記載されている。たしかに神谷は『生きがいについて』発刊後しばらくは時の人となったが、自身があまり出たがらない性格であったことから、講演やコラム執筆、座談会等の文化的活動が主となり、小川正子ほどの求心力はもたなかった。それが没後、1990 年代に入って美智子妃・紀子妃との関わりが知られるようになり、広く人口に膾炙することになる。
- (49) 出版業界では、重版と同時に帯が重版・新版されるとは限らない。
- (50) 皇室報道は、テレビがまず迅速に報道し、次に新聞、雑誌と媒体を移して報じられる。雑誌は速報性で劣る分、「永久保存版」としてグラフ系の臨時増刊号を発行したが、新聞社系の増刊号が天皇に焦点化するのに対し、女性週刊誌は皇后を中心に編集する（植田康夫「『愛』と『やさしさ』の図像学―週間天皇制―が作った「皇室」イメージ」『新聞学評論』1991 年、212-234 頁）。
- (51) 前掲、宮原安春。
- (52) 「秘話 美智子皇后「最悪の日々」を癒した著名な精神科女医」『週刊朝日』1997 年、102 (33)、148-151 頁。
- (53) 前掲、宮原安春、45-46 頁。
- (54) 「美智子さまと封印された聖書 第4回」『女性自身』1999 年、3 (2)、62-64 頁。
- (55) 代表的な記事として、『コスモポリタン』（1991 年、4 月号、86-91 頁）「ハンセン病患者の心の闇に灯をともした精神科医 神谷美恵子さんと長島愛生園」、『Hanako』（1989 年、11 (9)、120 頁）では「書評：「うつわの歌」彼女は言葉ではなく、一個の行為だった」など。
- (56) 神谷美恵子コレクション『生きがいについて』2004 年、『人間をみつめて』2004 年、『こころの旅』2005 年、『遍歴』2005 年、『本、そして人』2005 年、みすず書房。
- (57) 片野真佐子『皇后の近代』講談社、2003 年、166 頁。
- (58) 高野六郎「癪の根絶」『公衆衛生』1931 年、8 月号、490 頁。

- (59) 前掲、藤野豊、2006 年。ならびに田川裕美子「ハンセン病と皇室」『ハンセン病市民学会年報』2007 年。
- (60) 片野真佐子「近代皇后論」『天皇と王権を考える 7 ジェンダーと差別』岩波書店、2002 年。高松宮妃喜久子もハンセン病医療に貢献したが、主導は夫である高松宮であり、貞明皇后のように象徴的役割を果たしたわけではなかった。
- (61) 1972 年の『世界』において、神谷と親交の深かった島崎敏樹（東京大学医学部精神科教授）は、「失われた生きがい」と題するエッセイですでに「生きがいのテーマはもう乱掘されつくしたようにみえる」と指摘している。1982 年の『月刊社会教育』特集「働く喜びと生きがい」は、「PHP 誌が「生きがい」問題を取り上げて十余年、不況への突入、慢性的な低成長とともに「生きがい」論はまったくといっていいほど影を潜めてしまった」と当時の状況を総括している。
- (62) 成田稔「天皇・皇后両陛下をお迎えして」『藤楓だより』1991 年。
- (63) 前掲、片野真佐子、2003 年、206 頁。
- (64) 「岡山・長島 神谷美恵子さんとの交感にみちびかれ 美智子皇后は何に祈り涙されるのか」『週刊ポスト』2010 年、5 月 7・14 日合併号。
- (65) 「祈りの 42 年 皇后美智子さま 75 ハンセン病元患者が涙した慈愛の手—全国に 15 ある療養所を訪ね続けられる思い—」『女性セブン』2010 年、6 月号。